

＜ラウンドテーブル報告 4＞

アスリート学生の初年次教育を考える ーデュアルキャリアを支える入学前教育・初年次ゼミの視点からー

【企画者】 吉村充功 (日本文理大学)
【司会者】 東寺祐亮 (日本文理大学)
【話題提供者】 中村有希 (九州共立大学)
矢部哲也 (山梨学院大学)
山本啓一 (北陸大学)
吉村充功 (日本文理大学)

1. はじめに

アスリート学生に対しては、近年「デュアルキャリア」という考え方が提唱されるようになってきた。一般社団法人大学スポーツ協会 (UNIVAS) によると、「大学スポーツにおける『デュアルキャリア』とは、学業、競技活動などを通じて自身のキャリアをより豊かにするために取り組むことを意味」している。文部科学省が2017年3月に取りまとめた「大学スポーツの振興に関する検討会議最終とりまとめ」では、競技団体と大学との間で組織的な連携が取られ、学生が学業とスポーツを両立しやすい環境の構築、アスリート学生に対する大学での学修支援や将来に向けたキャリア形成支援の充実が求められている。

しかし、デュアルキャリアに関してはいくつかの問題が存在する。1) デュアルキャリアの定義がいまだ揺れており理解が十分になされていないこと、2) 支援策が正課教育との関連性で考えられていないこと、3) 支援策が学業との両立という消極的な目標にとどまりがちでスポーツと学業との相乗効果をもたらすような積極的な内容を打ち出していないこと、などがあげられる。中でも、最大の問題は、アスリート学生のデュアルキャリア支援の積極的な意義を、正課教育を担当する

大学教員が意識する仕組みが存在しないことである。

これまでアスリート学生のデュアルキャリア支援は、「学力不足の運動部学生のための支援」という消極的なアプローチとして捉えられていないだろうか。多くのアスリート学生の優位性は、幼少期から一つのスポーツ競技に一貫して打ち込んできた豊富な経験であり、これらの「スポーツ経験」を「学修成果」に結びつける初年次教育プログラムの開発が、我が国大学スポーツの現状において必要不可欠ではないかというのが、本ラウンドテーブルの問題意識である。

本ラウンドテーブルではまず、以上の趣旨説明を吉村から行ったのち、スポーツ系学部には所属する教員の立場からアスリート学生の初年次ゼミに関わってきた中村と矢部、スポーツ系学部ではない学部における教育改革の視点からの初年次教育や入学前教育の開発、実践に関わってきた山本と吉村からそれぞれ話題提供を行った。その後、参加者との意見交換を行った。参加者25名。

2. 話題提供 (1) 中村有希「九州共立大学スポーツ学部における初年次教育の取り組み」

(1) はじめに

九州共立大学スポーツ学部は、陸上競技

部、レスリング部などを筆頭に全国大会で優秀な成績を修めるスポーツ特待生や、保健体育教諭を志す学生、スポーツトレーナーを志す学生、スポーツを学びながら公務員を志す学生など約300名で構成される。スポーツ学部は実技科目が多いことから、過去には集団行動や学内のごみ拾い活動、朝礼などを教育内容に取り入れていた時期もあったが、学生の変化や大学教育の流れを受けながら少しずつ教育内容の改善に努めてきた。

話題提供では、現在の本学スポーツ学部における初年次教育の取り組みを紹介した。

(2) 初年次教育の概要

本学部における初年次教育科目は、1年次前期に「福原学」という科目で開講されている。1クラス約20名で14クラスに編成され、14名の教員がクラス担任として担当する。

これらの科目のねらいは、1) 福原学園の歴史や建学の精神、スポーツ学部の理念を理解すること、2) 高校と大学の学びの違いを理解すること、3) 大学での学修を円滑にするために学内施設の利用方法を理解すること、4) クラスの仲間づくりを深めることをねらいとしている。

授業内容は、上述の四つのねらいに合わせた内容で実施される。例えば、1)～3) は学部長講話、学生便覧のテスト、自校史の学び、図書館利用の方法、プログテスト解説による自己分析シートの作成などの取り組みによって、大学生として学ぶためのセットアップを行う。また、4) クラスの仲間づくりでは、身体アクティビティや共立テリトリーマップの作成を通して、学生間や担任と学生の人間関係構築をねらいとした内容としている。特に、本学スポーツ学部はクラス単位で実技科目や講義科目を受講することが多く、他学部よりもクラス単位の繋がりが深くなる。したがって、クラスの人間関係構築が重要な要素と捉えていることから、仲間づくりをねらいとした内容を多く取り入れている。

以上の初年次教育の結果、学生間や担任との人間関係構築、学生の不安解消につながっている。今後も学生の変化に応じた教育目標、教育内容に対応すべく検討していく。

3. 話題提供 (2) 矢部哲也「アスリート経験を持つ学生に対する言語活動を中心とした初年次教育」

山梨学院大学スポーツ科学部では、2022年度に240名の新入生に対し、スポーツ基礎演習という科目で初年次教育を実施した。以下にスポーツ基礎演習での取り組みを報告する。

スポーツ基礎演習では、1年生を10クラスに分け、各クラスに教員を1名ずつ配置する少人数教育を展開している。また本学には、先輩学生が授業をサポートするチューデント・アシスタント(以下、SA)制度があり、本科目でもSA制度を活用し、SAも各クラスに配置することで手厚い指導が可能となっている。本学部はアスリート経験を有する学生が多く在籍しており、在学生の約8割が本学強化育成クラブに所属し競技を継続している。そのような背景を持つ学生に対して、スポーツ基礎演習では、大学での学び方と、読む、聞く、書く、伝えるなどの言語活動の2点を主な修得目標に掲げている。

大学での学び方については、大学スポーツ協会監修「大学の運動部学生のための『学び』のハンドブック」を利用し授業を実施した。限られた時間の中ですべての内容を理解させるため、各グループが担当する1ページを読み、担当外のページについては他グループから聞いて学ぶアクティブ・ブック・ダイアログを採用した。他グループへ伝えるという言語活動の場面を作ることで、話し手の理解を促すことができたと考える。また、聞き手が発表に対して質問や感想を伝えることで、話し手は理解できていない部分を確認でき、聞き手も理解するために真剣に聞く姿勢

を整えることができたと感じる。スポーツに関する教材は書籍だけではなく、本学に所属する強化育成クラブの監督やコーチの学生の頃の話や卒業後のキャリア、指導者としての考え方などをテーマとした対談も教材とした。

これらの教材を読む、または聞いた後には、レポートを書くことで自身に落とし込んでいく作業を行った。レポートの作成方法や文章を書く上での基本的なルールなども修得させたいと考え、レポート作成に際しては、問いの立て方、情報収集の仕方などのテーマを設定し、学びながら進めた。さらに、レポートを学生間で添削し合うことで、自身の文章を指摘される経験や、他人の文章を読むことなどから、多くの気づきにつながったと感じた。

これらの取り組みにより一定の効果は得られたものの、社会人や生活者としてのマナー、ICTリテラシーの欠如なども新たな課題として出てきている。初年次教育ではこれらの課題を解決していけるよう、柔軟に内容を再構築していきたい。

4. 話題提供 (3) 山本啓一「北陸大学経済経営学部におけるアスリート学生を対象とした取組」

北陸大学経済経営学部は、2019年度のカリキュラムから本学の強化クラブ(サッカー部、硬式野球部、アイスホッケー部等の計8部)の部員を対象に、「一般教育実践講座Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」(1～3年)というアドホック科目を活用する形で「スポーツと言語技術」という内容の科目を開講している(各1単位)。当該授業の概要は以下の通りである。

(1) ねらい・到達目標

この科目は、アスリート学生として求められるスキルを授業を通じて育成しようとするねらいがある。具体的には、スポーツ等の場面において活用できる言語リテラシーを身に

つけると同時に、部活経験・スポーツ経験の言語化(リフレクション)によって自己を成長させることを目的としている。

到達目標は次の三つである。1) スポーツ活動における自分自身の成功体験・失敗体験を分析し、課題発見・解決策の立案・実行ができる。2) スポーツ活動における自分自身の目標を具体的・客観的に設定できる。3) 身体動作や試合展開に関する論理的な分析力等の言語表現能力を身につける。

(2) 科目導入の背景

本学の経済経営学部は、強化クラブに所属する学生が多い。本学にはスポーツ学部がなく、強化クラブ学生はスポーツと学業のデュアルキャリアを意識しづらい状況にある。また、強化クラブ学生の対人コミュニケーション力等に代表されるコンピテンシー(行動特性)は総じて高いものの、論理的思考力や表現力といった「言語能力」に関しては、育成の余地が大きい。こうした言語能力は、社会人として求められる能力にとどまらず、アスリートとしてのスキルとも関わる。したがって、アスリートスキルの育成という点から、「学生アスリートにおける言語能力の育成と活用」は重要な要素となる。

(3) 授業内容について

3科目いずれも、デュアルキャリアの重要性、自己調整学習スキル・レジリエンス・アスリートライフスキル等の自己分析、目標設定と実行・検証といった内容を含んでいる。

1年生では、これまでのスポーツ経験の振り返りや、高校の部活と大学スポーツの違いの認識など、主体的なアスリート学生への転換を支援する内容に重点を置いている。また、受講生のチームビルディング活動を最初に行うなど、他の部活に所属する学生とも自由に意見交換しあえる関係づくりも重視している。2年生は、スポーツの名場面解説など、競技場面の論理的・具体的な説明を詳細に行う内容が中心となる。3年生は、自己のリー

ダーシップやチームワークを分析する内容となる。

これまでのところ、毎年10名から20名ほどが受講しており、授業評価も高い。受講生の感想も、「この授業を通して一つひとつのプレーをしっかりと観察して分析できるようになって、その分析したことを言語化して相手に伝えることができるようになった」、「3年次に立てた目標設定が、今まで何度も繰り返したからか、現実的に立てられた。これにより、自分の考えが鮮明になり目標から逆算した行動がとれるようになった」との内容がみられた。今年度は、履修経験者が後輩に本科目を勧め、当該部活の履修生の増加も起きている。

5. 話題提供 (4) 吉村充功「日本文理大学におけるアスリート学生を対象とした入学前教育の取組」

日本文理大学では、学校推薦型選抜・総合型選抜で入学が決定したすべての入学予定者に入学前教育を実施している。2022年度の入学生までは、高校までの復習を兼ねて、リメディアルのe-learning教材と、本学の教育理念(人間力の育成)への理解を深める作文課題を共通で課していた。2023年度の強化スポーツ部(硬式野球部、サッカー部、チアリーディング部等の計8部)入部予定の入学予定者には、前述のリメディアル教材はそのままに、これまでの作文課題を「デュアルキャリア」を意識させるUNIVASのアカデミックパートナーが提供する教材「運動部学生のためのスポーツ探究ことば入門」を採用した。

本学のアスリート学生の多くは経営経済学部 zu 所属し、一部の学生が工学部に所属している。そのため、入学後の専門教育や初年次ゼミ(本学では全学共通の必修科目として、前期「社会参画入門」、後期「社会参画実習」を担任制科目として開講)では、一般学生と

アスリート学生が混在したクラス編成となっている。部活動を主にし、学業を二の次とするアスリート学生がいる場合には、初年次ゼミ等のクラス運営に困難をきたすクラスが存在している。そこで、「学業」と「スポーツ」をつなぎ、両立させる「デュアルキャリア」にスムーズに移行することを企図して、この内容に特化した入学前課題を課すこととした。採用した教材は、話題提供者等である山本、中村、東寺が作成に関わっており、アスリート学生の豊富なスポーツ経験に立脚し、目標設定・計画立案や経験のふりかえり等をスモールステップで言語化、作文する内容である。

取り組みには、8部の全入学予定者200名弱が2023年1月下旬～入学直後までの約2ヵ月半で取り組んだ。3冊の教材を一括で送付、順次取り組みを進めさせ、各冊子のまとめ課題であるレポート(作文課題)を期限を切って、毎回郵送回収する方法を採った。

今回の取り組みの工夫点は、まず家族や高校の担任または指導者など、進捗に応じてアドバイスをいただける身近な方を「伴走者」として、最初に設定させた。多くの学生が「家族」に依頼した。次に、提出されたレポートの採点(ループリック表による)を各部活の指導者に依頼した。このねらいは、一つは指導者が見ることをあらかじめ学生に伝え、しっかり取り組むモチベーションを与えるため、もう一つは指導者に一人ひとりの学生がどのような競技経験をし、どのように考え競技に打ち込んできたか、また入学後にどのような姿勢で競技へ向き合おうとしているかをあらかじめ理解するためである。指導者一人あたりの担当学生は10～15名程度できめ細かく対応できたようであり、概ね好評であった。学生からは、「自分の経験をふりかえることができ、将来について考える機会になった。」「スポーツと勉強の関係性について理解できた。」といった声が聞かれた。今後はこ

れを踏まえた初年次ゼミの改善に取り組む予定である。

6. おわりに

参加者との意見交換では、アスリート学生の現状や彼らの考え方、一般学生との関係性や指導者の巻き込み方など各大学が抱えている課題等が指摘された。アスリート学生の

デュアルキャリアを組織的に支援する重要性があらためて確認できたことから、今後はあるべき初年次教育について議論を続けたい。

付記

話題提供 (1) (3) (4) は JSPS 科研費 JP23K02541 の助成を受けたものです。